

# 創造性に富んだ、未来を切り拓く生徒の育成（2年次／2年計画）

～「主体的な学び」のプロセスモデル実現を目指して～

研究主任 進藤 秀俊

## 1. 研究主題の設定理由

### （1）生徒たちが生きる未来

創設75周年を迎えた国際連合では、気候変動や地域紛争、人権侵害などの深刻な状況を克服し、持続可能な社会を実現することをめざして、共通目標として「SDGs」を掲げ、各国政府や市民団体が活動を展開している。

AI技術の飛躍的進歩を背景とした第4次産業革命の影響も非常に大きい。産業や労働、生活の在り方が一変する可能性があり、これまでの「当たり前」が「当たり前」ではなくなってきている。

日本では超少子高齢化が進み、経済や社会保障制度、地域社会の在り方が問われている。また、アジア諸国をはじめとした新興国の台頭を受け、日本の国際的地位は変化しつつある。日本企業の国際的地位は相対的に低下し、産業構造も変化している。新型コロナウイルスの感染拡大を受け、新しいビジネスモデルが展開され、企業の国際的競争は激しさを増している。また、人口減少を見据え、外国人労働者の受け入れについても方向転換がなされ、外国にルーツをもつ人々の日本の総人口に占める割合が高くなってきている。今後、多様な文化的背景をもった人々が共生する社会を目指さなければならない。地域の維持や活性化も喫緊の課題であり、新しい社会、とくに次世代の地域社会の担い手を育むことが求められている。そうした大きな変化の中で、日本政府は、「Society5.0」という未来社会像を提唱している。それは、「サイバー空間とフィジカル空間を高度に融合させたシステムにより実現」（内閣府）する社会で、経済発展や社会的課題の解決につながると考えられている。

つまり、生徒たちが生きる未来とは、「予測困難で、大きく変化する社会」であり、「これまで以上に困難な課題に直面する時代」であるといえる。その未来において、より公正で豊かな社会をつくりつつ、一人ひとりが自己実現を果たして幸福な人生を送るためには、これまでの価値観を尊重しつつ、技術革新や新たな知の創出の恩恵を活かしながら、直面する課題の解決に向かい、新たな価値を創造することが求められると考える。

### （2）スクールプラン

山梨大学教育学部附属四校園（幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校）では、大学とも連携しながら、一貫して育成を目指す資質・能力を右の通り、子ども

附属四校園の教育活動を貫く育成を目指す「子ども像」  
個人の尊厳を重んじ、多様な文化や価値観を受け入れ、自ら課題を見いだし、解決に努力する積極性・先見性・創造性に富んだ子ども

もの姿として示した。本校においても、スクールプランを掲げ、その資質・能力の育成を目指して教育活動に取り組んでいる。昨今の、新型コロナウイルス感染症拡大の影響による社会の有り様の大きな変化に見られるように、これからの社会は予測困難であり、そこで生き抜く子どもたちには、多様性を重んじつつ、他者と協同して社会の諸問題の解決に当たったり、よりよい社会を築くために創意工夫したりすることが求められる。

ここ数年は、スクールプランの実現を目指して、四校園のつながりを意識した、総合的な学習の時間（本校ではSELFEと呼ぶ）における「探究的な学習のモデル」について研究を進めてきた。（図1参照）



図1 「きりのは」の探究サイクル

とくに、「自ら課題を見いだす」活動やその課題の「解決に努力する」活動の工夫、探究に必要な資質・能力の育成について実践を積み重ねてきた。その成果として、探究的な学習を積み重ねる中で、「課題設定能力」や「情報収集・分析能力」などの課題を解決するために必要な資質・能力は育まれてきている。一方で、それは教師が与えた課題について、教師の指導の下で実現されていることであり、生徒が「積極性」をもって取り組んでいるか、課題に対する自分なりの結論を導き出すという意味での「創造性」を発揮させられているかという点で課題が残る。

### (3) これまでの研究の経過

- 【平成23年度～平成25年度】「自ら問う力を育む授業の創造～思考力・判断力・表現力等の育成を目指して～」
- ・「知的に自立する」、すなわち生徒が自ら問いを発し、解決に向かおうとする生徒の育成を目指した。
  - ・「生徒にもたせたい問い」、「生徒に問いをもたせるための教材」や「教師の役割」の在り方、「問いの見取り」などについて研究を行った。
  - ・「指示待ち」の状態から脱却し、自ら課題意識をもって学び続けようとする、学びへの主体性を養うことができた。

### 【平成26年度～平成28年度】『深く考える』授業の創造

- ・課題に対する「自分なりの結論」を吟味し、それを改善・発展させながら、学び続ける生徒の育成を目指した。
- ・「視点を変える」ための資料提示や他者との交流、振り返りの工夫などについて研究を行った。
- ・授業では、さまざまな要素が相互に関係し合っていること、それらを意識して授業をデザインすることの必要性を再認識することができた。

## 【平成 29 年度～令和元年度】「新たな世界を主体的に創造する生徒の育成」

- ・昨年度までの 3 年間の研究の中で、学習指導要領（平成 29 年告示）で示される 3 つの資質・能力のうち、「知識及び技能」及び「思考力、判断力、表現力等」を育むための手立てや評価の工夫について明らかになったことが多かった。一方で、「学びに向かう力、人間性等」を育成するための「主体的な学び」の実現と評価については課題が残った。

### ○1 年次『見方・考え方』を働かせた学びを通して」

- ・本校では、「見方・考え方」を働かせた学びとは、「各教科等の特質に応じた『見方・考え方』にそって、生徒が持つ、スキーマ（経験則）や認識の枠組みをより良いものに修正したり、鍛えたりして、豊かで確かなものとし、その深い認識をもとに資質・能力を育むこと」であると考えた。
- ・「見方・考え方」を働かせた学びを実現するためには、生徒の学習過程に以下の 4 つの要素を位置づける必要があることが明らかになった。
  - ①教材・題材との出会い（生徒が、これまでの自分のスキーマとのずれに疑問をもつ。）
  - ②学習課題の設定（生徒の疑問と教材価値をすり合わせ、学習課題を設定する。）
  - ③学習課題の解決（既有知識や自他の考えを活用しながら、学習課題を解決する。）
  - ④自己の変容への気づき（自分の「学び」に価値を見出し、「学び方」を自覚する。）

### ○2 年次「資質・能力を見取る評価の在り方」

- ・「見方・考え方を働かせた学び」を充実させ、指導と評価の一体化をめざすべく、特に各教科で「生徒の学習調整を促す形成的評価の工夫」「資質・能力を可視化する工夫」を中心に実践を積み重ねた。
- ・「生徒の学習調整を促す形成的評価の工夫」に関しては、学習における思考の過程を記述させることで、生徒に自らの学びの有り様や到達度を自覚させることができた。また、目標の達成に必要な視点や考え方の広がりや深まり、学習活動などについて、教師のフィードバックを受けながら、自らの学習を調整する姿が見られた。こうした学習過程をとおして、自己のメタ認知能力を高められることが明らかになった。
- ・「資質・能力を可視化する工夫」に関しては、身に付けさせたい資質・能力を具現化した、言語活動やパフォーマンス課題を設定することの有用性が明らかになった。課題を設定する上でポイントとなるのが、学習のまとまり（単元）や毎回の授業を構造化することである。具体的には、指導者が最終的に目指す生徒の姿の具体をイメージし、課題設定のための教材研究や生徒の実態把握を踏まえて、学びのつながりをつくることである。

### ○3 年次「教科等横断的な教育課程の実現に向けて」

- ・教科研究を深化させ、生徒の「学びの質」を高め、各教科で育成をめざす資質・能力が身に付くよう、指導と評価の在り方についての研究を深めた。
- ・各教科で身に付けた資質・能力を、実社会で活かすことのできる、より汎用性の高い資質・能力へと高めるために、教科等横断的な視点に立つことの必要性があると考えた。そこで、「総合的な学習の時間」で育む資質・能力を軸に、各教科で育む資質・能力との関連性を明らかにし、教科等横断的な教育課程の編成に取り組んだ。

## （4）教育に関わる国の動向

### ①Society5.0 を牽引する人材について

文部科学省は、「技術革新と社会課題をつなげ、プラットフォームを創造する人材」「技術革新や価値創造の源となる飛躍知を発見・創造する人材」及び「様々な分野において AI やデータの力を最大限活用し展開できる人材」であるとしている。プラットフォームとは、あるものを動かす土台となる環境のことで、ここでは社会課題を解決する新たな価値創造を実現する環境やシステムのことを指す。

## ②学習指導要領（平成 29 年告示）

総則には次のように述べられている。（文部科学省、2017）

「中央教育審議会答申においては、予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要であること、こうした力は全く新しい力ということではなく学校教育が長年その育成を目指してきた『生きる力』であることを改めて捉え直し、学校教育がしっかりとその強みを発揮できるようにしていくことが必要とされた。」

これからの社会や人生という「未来」を生徒自身が創るための資質・能力を育成することが求められている。その資質・能力の3つの柱は、「生きて働く『知識・技能』」、「未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』」、「学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』」である。これらの資質・能力を育成するためには「主体的・対話的で深い学び」を実現することが必要である。この学びを実現するため、「学習過程を質的に高める」（田村、2018、17）ことが求められる。「主体的・対話的で深い学び」は、そのための授業改善の視点でもある。新学習指導要領総則には次のように述べられている。（文部科学省、2017）

- ア. 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているかという視点。
- イ. 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているかという視点。
- ウ. 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているかという視点。

また、「主体的・対話的で深い学び」については、1 単位時間の授業の中だけで実現できるものではなく、単元や題材などの学習のまとまりを見通し、その中に位置づけることが大切であると指摘されている。

### （5）生徒の実態

教師や仲間との良好な関係を基礎として、意欲的に学習に取り組む生徒が多い。難しい課題に挑戦したり、粘り強く学習に取り組んだりすることに価値を感じる生徒も多い。また、これまでの授業実践の成果として、与えられた話し合い活動や課題に取り組む中で、自らの考えを深めたり、広げたりしようとする姿や学習成果を活かして学びを深めようとする姿が見られるようになってきた。

一方で、将来の夢や就きたい職業があいまいだったり、日常生活において他者に目を向けようとする意識が弱かったりする様子も見られる。このことは、中学校での学びと実社会での自らの生き方が結びつきにくいことや、自らの学びを活かして、他者や社会全体に貢献しようとする意識の低さ、他者や環境に対する関心の低さからもうかがえる。また、本校の学力学習状況調査等の結果によると、自分から学習に取り組もうとしている生徒の割合はおよそ半分で、主体的に学びに向かう姿勢に課題があるといえる。話し合い活動についても、自分たちから話し合いを始め、物事を解決しようとする姿勢はあまり見られず、教師による場面設定に頼っている現状がある。物事を判断するとき、他者の意見を基準とする生徒も多く、自分なりの視点をもって自らの学習を振り返り、その後の学びに活かすことに課題が残る。

令和2年度末には、本校全体研究の共同研究者である、山梨大学の田中健史朗准教授(カウンセリング心理学)の協力を得て、「生徒の学びの調査」を行った。この調査は、田中准教授に作成・分析を行っていただいたもので、44項目からなるアンケート調査である。これは、生徒の学びを次の3つの観点から調査するものである。

- ア. 学習におけるメタ認知活動（現在の学習状況を考慮し、後の学習の進行を調整する方略）
- イ. 学習に対する動機づけ（文部科学省の掲げる主体的な学びにおける「学ぶことに興味をもつ」、「自己のキャリア形成の方向性と関連づける」と関連する概念）
- ウ. スクールエンゲージメント（学校生活における様々な活動への主体的で積極的な関与や心理状態）

調査結果から、本校生徒の学びの動機づけについては、とくに自律的動機づけが高い水準にあると考えられる。一方で、内発的動機づけについては伸びしろがある。また、学習活動については見通しをもって取り組んだり、見直しをしながら取り組んだりすることができていない場面があると考えられる。さらに、学習活動を他の単元や他教科での学びにつなげようとする側面が弱く、学習内容と実社会とのつながりに対する意識にも改善の余地がある。

## 2. 研究主題について

### (1) 未来を切り拓く生徒

本研究において育成を目指す生徒像は、「創造性に富んだ、未来を切り拓く生徒」である。「未来を切り拓く」とは、よりよい人生やより豊かで公正な社会を自分たちの手で創るということである。上に述べたように、生徒たちが生きる「未来」は、「予測困難で、大きく変化する社会」であり、「これまで以上に困難な課題に直面する時代」である。その中で、「未来を切り拓く」ためには、主体的に課題を見出し、その解決に取り組む必要がある。また、そうした課題は一人で解決することは難しく、他者と積極的に関わり、学び合いながら、協同して取り組まなければならない。さらに Iot やビッグデータの活用、AI 技術などに基づく第4次産業革命の進展（内閣府、2017）により、情報としての知識や技能を「自分の考えとして整理し意味付けたり、それを自覚したり共有したりすること」（田村、2018、24）が大切になってきている。

本校では、「附属四校園の教育活動を貫く育成を目指す『子ども像』」やスクールプランの実現を目指して、「創造性」の育成に取り組んできた。私たちの考える「創造性」とは、「自ら課題を見出し、その解決に向かって、これまでに学んだことや新たな知、技術革新を結び付けて、新たな価値を創造するための資質・能力」である。ここでいう「価値」とは、各自が見出した課題を解決すること、またこれまでの学びに新たな価値を見出すことである。

「創造性」は、上に述べたような、「未来を切り拓く」ために必要な資質・能力と一致するものである。また、「創造性」は学習指導要領（平成29年告示）において、「現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力」として例示された「新たな価値を生み出す豊かな創造性」に関わるものである。

「創造性」を資質・能力の3つの柱に沿って整理すると、次のようになる。（表1）

表1 「創造性」の整理

知識及び技能	課題の解決に必要な知識・技能
思考力、判断力、表現力等	課題の解決に向かって考え、意味や価値を創造する力
学びに向かう力、人間性等	自ら課題を見出し、その解決に主体的に取り組もうとする態度。

このうち、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」については、生徒の実態から、これまでの研究を通じて育まれてきたと考えられる。一方で、「自ら課題を見出し、その解決に主体的に取り組もうとする態度」については、生徒の実態からは育成が不十分であるといえる。

そこで本研究では、「自ら課題を見出し、その解決に主体的に取り組もうとする態度」を育成することを目指すこととした。この態度は、学校の学びでは「主体的に学習に取り組む態度」として現れる。そのため、授業においては、「主体的な学び」をいかにデザインするかを研究したい。

### 3. 研究の内容

#### (1) 主体的な学び

本校の考える「主体的な学び」とは、エンゲージメントが高められた姿である。すなわち、「生徒が粘り強く学習に取り組み、自己調整しながら学ぶ姿」である。

「主体的な学び」について、本校では田中准教授に助言をいただきながら、エンゲージメントに着目して、「主体的な学び」を捉え、その実現を目指して工夫を行うこととした。エンゲージメントに着目することで、「生徒の学び」の到達地点だけでなく、生徒の内面で繰り広げられている「学び」そのものの様子を把握できるので、単元や授業のデザインが行いやすくなる。

エンゲージメントには3つの側面があり、それらは密接に関わり合っている。

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"><li>① 認知的エンゲージメント＝生徒の頭脳の中で繰り広げられる、学びの質を高めようとする働き、自律性。</li><li>② 行動的エンゲージメント＝見える形で現れる、没頭する姿で、量的に測れるもの。</li><li>③ 感情的エンゲージメント＝生徒の内面に見られる、学びに関するポジティブな感情。</li></ul> |
|--|

文部科学省が、「主体的に学習に取り組む態度」の評価の尺度として示している「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」は、エンゲージメントの3つの側面すべてで見られる。例えば、認知的エンゲージメントに見られる粘り強さとは、自らの学習方略を修正しながら学習課題に取り組むことであり、行動的エンゲージメントに見られる粘り強さとは、学習課題を解決するために繰り返し演習を行う姿であり、感情的エンゲージメントに見られる粘り強さとは、なかなか解決できない学習課題に挑戦し続けようとする感情であると考えられる。

#### (2) 本校の考える「主体的な学び」と資質・能力の3つの柱

本校の考える「主体的な学び」とは、学習指導要領（平成29年告示）で示された資質・能力の3つの柱のうち、「学びに向かう力、人間性等」を育成するために実現されるべき学びのあり方である。学習指導要領で示されている通り、資質・能力の3つの柱は相互に深く関わっており、「知識及び技能」の習得・活用を通じて、「思考力、判断力、表現力等」を育む学びを実現する資質・能力こそ、「学びに向かう力、人間性等」であるといえる。つまり、本校の考える「主体的な学び」とは、各教科で目標とする「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」の資質・能力を育成するプロセスになると考える。

#### (3) 本校の考える「主体的な学び」と「主体的・対話的で深い学び」

本校の考える「主体的な学び」とは、これまでの研究の延長線上にあり、平成29年度から平成31年度までの研究で明らかになった「教材や他者、自分自身との出会い・対話の工夫」によって生徒の学びは深まることを踏まえたものである。また、本校の考える「主体的な学び」を実現の目的の一つは、生徒自身が「自ら学びを深められるようにすること」にある。つまり、本校の考える「主体的な学び」とは、「主体的」であるだけでなく、「対話的で深い学び」でもあると考える。

#### (4) 主体的な学びを実現するための手立て

本校では、生徒のエンゲージメントを高め、「主体的な学び」を実現するために、「主体的な学び」のプロセスモデルを考案した。(図2参照)これは、「主体的な学び」の具体的な学習過程と、それぞれの学習過程における、生徒のエンゲージメントが高められた姿を示したものである。なお、このプロセスモデルは、チャールズ・M・ライゲルズによる「自己調整学習のための連続変化フレームワーク」を参考に、田中准教授の助言をもとに作成した。

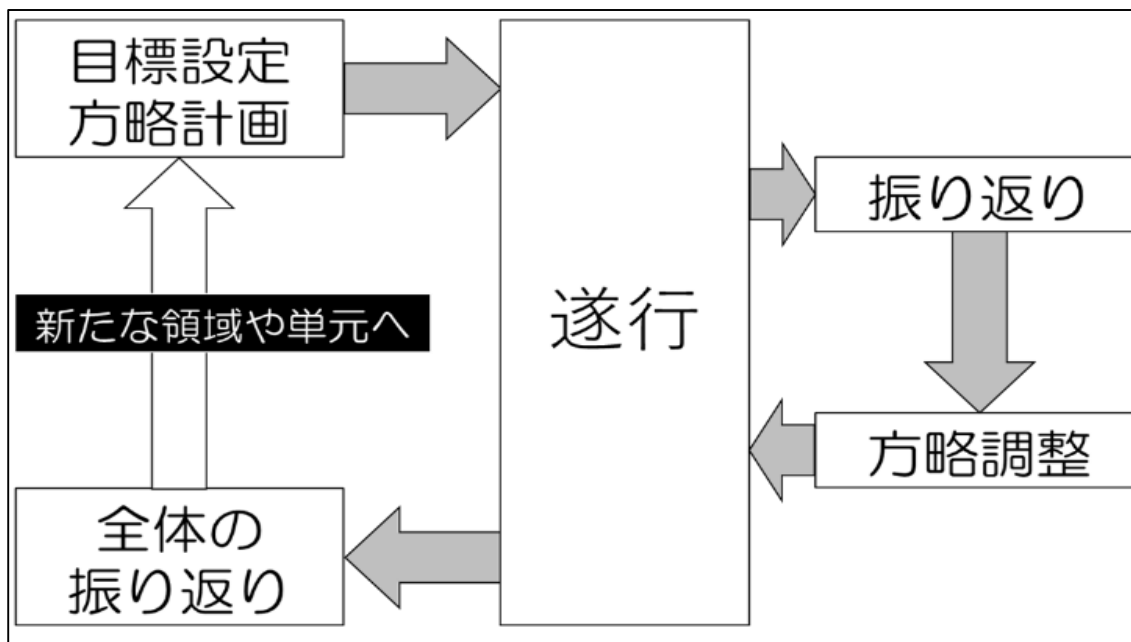
このプロセスモデルにおいて最も重要なのが、「目標設定」の段階である。「学びを生徒のものにできるかどうか」によって「主体的な」学びが実現できるかどうかが決まってしまうからだ。また、目標に対する自らの学びを振り返り、目標の達成に向けて学び方を工夫することで、「主体的な学び」は実現される。ゆえに。生徒が自らの学びを振り返り、次の学びにつなげる段階である「振り返り」「方略調整」「全体の振り返り」も、「主体的な学び」を実現するためには重要な段階であると考えた。

全教科でプロセスモデルをもとに、各教科の特性を踏まえて単元計画や授業の展開を立てる。「主体的な学び」においては、「自らの学びを振り返り、調整すること」が重要な役割を果たす。そのため、すべての単元計画の中に、「振り返り」「方略調整」「全体の振り返り」を組み込むこととした。

このモデルに示されている学びを初めから生徒一人で実現ことは難しい。そのため、初期段階においては教師主導で「主体的な学び」を仕組み、生徒に経験させる。生徒の学びの姿を踏まえながら、学習方略などについて選択肢の中から選ぶ活動などを少しずつ取り入れ、最終的には生徒自身によって「主体的な学び」が実現できるようにしていきたい。

#### (5) 主体的な学びの評価

「主体的な学び」のプロセスモデルに示されるような学びの姿が実現できたかを評価する。具体的な評価の観点や場面、規準などを示したい。また、この評価は生徒の学びそのものをとらえようとするものであり、学習評価としての「主体的に学習に取り組む態度」の評価の考え方と一致するものである。そのため、ここで行う「主体的な学び」の評価は、観点別評価や評定に用いる評価として扱う。「主体的に学習に取り組む態度」の評価でもあるので、「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」にも留意しながら評価を行っていきたい。



	エンゲージメントの高まり（生徒の姿）
目標設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高いレベルの関心をもつ課題や日常生活で直面する課題、現実世界で解決すべき課題、自らのキャリア形成に関連する課題を選択する。</li> <li>・挑戦の感覚、知的好奇心、学習への期待感をもつ。</li> </ul>
方略計画	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゴールを設定し、過去の学習経験を活かしながら、課題解決のための学習方略を考える。</li> </ul>
遂行	<ul style="list-style-type: none"> <li>・計画に基づいて、学習を遂行する。</li> <li>・計画した方略や必要に応じて調整した方略に基づいて、個人やグループでの学習活動に熱心に参加する。</li> </ul>
振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自らの学びの効果を振り返る。また、学習の進み具合を把握し、見通しをもつ。</li> </ul>
方略調整	<ul style="list-style-type: none"> <li>・必要に応じて学習方略を修正する。</li> </ul>
全体の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自らの学びの質や成果を振り返る。</li> <li>・学ぶ面白さや楽しさを感じたり、有能感や充実感をもったりする。</li> </ul>

図2 「主体的な学び」のプロセスモデル



## 4. 1年次の研究

1年次は、各教科において「主体的な学び」のプロセスモデルに基づいた単元構成や授業づくりに取り組んだ。また、「主体的な学び」の評価についても、教科ごとに具体的な評価場面と評価規準を設定し、実践を行った。各教科から挙げられた成果と課題は次の表の通りである。(表2)

表2 1年次の成果と課題

	成果	課題
国語	<ul style="list-style-type: none"> <li>主体的に学習に取り組む態度の評価について、見取りと振り返りシートを作成し実践的な形で行うことができた。</li> <li>プロセスモデルの実施と方向性について国語科独自の内容を検討することができた。</li> <li>3観点の評価について前倒しで研究したことで、今年度からの実施に向けての課題を見通して研究することができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>主体的に学習に取り組む態度の評価について、どの単元でも使えるようなものが必要だと感じたので教科で相談したい。</li> <li>振り返りシートの記述の時間をどのように確保するのか。またGワークスペースで行うことができるのか。記述項目の内容についても検討したい。</li> <li>学びのプロセスモデルを当てはめた授業の構想をどのように考えていくのか。</li> <li>語彙の獲得のために全学年共通して行う「ワードバンク」のシートの内容について何をどのような目的で書かせるか。</li> </ul>
社会	<ul style="list-style-type: none"> <li>プロセスモデルの実施と方向性について検討することができた。</li> <li>学びの記録を活用した振り返りの実施と学習課題の明確化ができるようになった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>形成的评价と総括的评价の場面分けが必要。</li> <li>単元全体の見通しと振り返りの場面設定をどのようにおこなうか。</li> <li>方略調整やまとめに時間がかかるので見通しを持った計画が必要。</li> <li>歴史的分野ではどのように方略調整を実施していくのか、地理や公民的分野よりも設定が難しい。</li> </ul>
数学	<ul style="list-style-type: none"> <li>「附属中 主体的な学びのプロセスモデル」を、「算数・数学の問題発見・解決の過程」に組み込むことができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「附属中 主体的な学びのプロセスモデル」を実践した後の、分析や検証が十分にできていなかった。</li> <li>まだまだ限定された単元でしかプロセスモデルを実践できていないので、他の単元ではどのような授業ができるか考えていきたい。</li> </ul>
理科	<ul style="list-style-type: none"> <li>主体的に学習に取り組む態度の評価について方法を考え、実践例を挙げて様々な方法を考え、意見や助言をいただいた。</li> <li>課題設定、学習調整を考えることにより、主体的な学びのプロセスモデルが少しずつ形になりつつある。</li> <li>振り返りシートの視点を与えて記述することにより、主体的に学習に取り組む態度の評価の見取りにつながった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>振り返りシートの視点を与えても一部の生徒が表現できないでいる。</li> <li>C評価に当たる生徒を減らす支援方法</li> <li>学びのプロセスモデルの確立。</li> <li>ICT 機器を活用して振り返りシートの電子化を目指す。</li> <li>ICT 機器やデジタル教科書の有効活用。</li> </ul>

音楽	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「主体的な学びのプロセスモデル」と器楽「箏」の授業において、「学びの過程」を作成し、実践することができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今回の過程において、よりよく進める方法と評価方法について、再検討したい。</li> <li>・まだ一つの分野のみなので、プロセスモデル更なる分野でも実践し試していきたい。</li> </ul>
美術	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プロセスモデルを参考にして、授業の流れを整理することができた。</li> <li>・題材同士のつながりに注目して、年間指導計画の見直しを行えた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎時間のねらいを明確にもたないと、振り返りが難しい。→ねらいを整理する</li> <li>・生徒自身がねらいや活動内容を理解していないと方略調整が難しい→わかりやすくねらいや活動内容を提示する。</li> </ul>
保健体育	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ねらいや視点の設定が明確になったことで、生徒が主体的に活動に望むことができた</li> <li>・評価の視点を明確にすることで、OPPシートや観察の見取りがスムーズに行えた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・評価指標の設定を行ったが、観察での評価の見取りは更なる工夫が必要。</li> <li>・主体的に取り組む態度を評価できるような学習カードの工夫</li> <li>・学習カードと観察の両方を取り入れた主体的に学習に取り組む態度の評価の工夫</li> <li>・タイムやラップの計測が簡易化できるICTの活用（活動の時間を確保）</li> <li>・エンゲージメントが高められた姿、生徒の内面で繰り広げられている学びそのものの様子を把握する手立てを明確にする（どのように授業の中でその場面を表出させるか）</li> </ul>
技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校からの連携を意識したプログラミング教育について提案することができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・評価方法について、どのように評価をしていくべきなのか検討する必要がある。</li> </ul>
家庭	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プロセスモデルと家庭科の学習過程を結び付けた、「学びの過程」を作成することができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・評価方法について、さらによりよい方法を検討したい。</li> </ul>
英語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主体的に学習に取り組む態度の評価について、振り返りシートの活用と見取り方について実践を重ねた。</li> <li>・学びのプロセスモデルの具体化をイメージして、単元計画を立てたり授業の構成を組み立てたりして実践を行った。</li> <li>・Google Workspaceのサービスを活用し、授業での学びと家庭学習、さらには教師の授業計画づくりとを有機的に結びつける工夫を行った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主体的に学習に取り組む態度の適切な評価の在り方について、研究を進める。</li> <li>・ICTを有効活用した授業実戦を積み重ねる。</li> <li>・学びのプロセスモデルを生徒たちに意識させる工夫を行う。</li> <li>・適切なパフォーマンス課題の設定とその評価方法について、研究を深める。</li> </ul>

各教科での実践を通して、私たちが実現を目指す「主体的な学び」の具体像がこれまでよりも明確になった。これを田中准教授の助言も踏まえて、「主体的な学び」のプロセスモデルの各学習過程に沿って、「粘り強く学ぶ側面」と「自己調整しながら学ぶ側面」に着目しながら整理した。(表3)ここでいう「粘り強く学ぶ側面」と「自己調整しながら学ぶ側面」とは、文部科学省が観点別評価「主体的に学習に取り組む態度」の側面として挙げている「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」に一致するものである。

表3 「主体的な学び」の具体像

	エンゲージメントの高まり（実践の中から見えてきた生徒の姿）	
	粘り強く学ぶ	自己調整しながら学ぶ
目標設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>単元の学習内容を、他教科の学習や自らのキャリア、生活、自らが生きる社会と関連づけて学習に取り組もうとしている。</li> <li>単元の学習内容に興味や価値を見出して取り組もうとしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>単元の目標に沿った、自分なりの学習目標を立てている。（発達段階によりレベルは違う）</li> </ul>
方略計画	<ul style="list-style-type: none"> <li>自らの学習目標の達成を目指して、よりよい学習方略を考えようとしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>過去の学習経験を活かしながら、目標達成のための学習方略を考えている。</li> </ul>
遂行	<ul style="list-style-type: none"> <li>自らの学習目標の達成を目指して、粘り強く学習に取り組んでいる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>計画した方略や必要に応じて調整した方略に基づいて、個人やグループでの学習活動に熱心に参加している。</li> </ul>
振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>自らの学習方略の成果と課題をよりの確にとらえようとしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自らの学習方略をモニタリングし、その成果や課題を挙げている。</li> </ul>
方略調整	<ul style="list-style-type: none"> <li>自らの学習目標の達成を目指して、よりよい学習方略を求めて、必要な修正を続けようとしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>必要に応じて学習方略を修正している。</li> </ul>
全体の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>単元の学習を通して、自らの目標達成のために努力し続けたことを明確にしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>単元の学習を通して、自らの目標達成のために工夫したことやその成果と課題を明確にしている。また、それを次の学習に活かそうとしている。</li> </ul>

また、校内研究会で各教科の実践を比較し協議する中で、「主体的な学び」の具体像には教科の本質や教科で育みたい資質・能力などが深く関わっているということも見えてきた。「見方・考え方」を働かせた学びにもつながるもので、各教科で考える「主体的な学び」とは何かについて考えをさらに深める必要がある。

「主体的な学び」の評価については、いくつかの課題が挙げられた。一つ目は、生徒の学びの姿をどのような形で表出させるべきかである。多くの教科ではワークシートを活用し、単元の学び全体を記録しようと試みた。「主体的な学び」は1時間の授業の中だけで育まれるものではないので、有効な方法だと考える。ただし課題として、本人の記述のみで本当に「生徒の学び」を捉えることができるのかという疑問が挙げられた。また、パフォーマンス課題を設定して取り組ませる方法や話し合い活動など具体的な学習活動（主に交流活動）を設定して取り組ませる方法、家庭学習の取り組み状況を活かす方法などを実践している教科もあった。今後どのような形で「生徒の学び」を表出させるべきか、さらに研究を深める必要がある。

二つ目は、表出された生徒の学びをどのように見取り、どのような規準で評価するべきかである。評価規準については、生徒の記述に示されたキーワードの内容や量などに注目して評価する方法をとる教科もあった。生徒の学びへのフィードバックのあり方も含めて実践を重ね、明らかにする必要がある。

## 5. 2年次の研究

### (1) 「主体的な学び」の具体像の深化

表3で示した「主体的な学び」の具体像について、各教科の本質や各教科で育みたい資質・能力を踏まえて、さらに具体化したい。また、その具体像に従って、単元をどのように仕組むべきかについても、実践を重ねて明確にしていきたい。

### (2) 「主体的な学び」の評価

1年次の成果と課題や田中准教授の助言、教育心理学の知見などをもとに、『主体的に学習に取り組む態度』の評価の枠組みを設定する。(表4)「主体的な学び」の具体的な姿をもとに設定するため、「評価の観点」は、プロセスモデルの学習過程をもとに考えた。また、「評価規準」の「B」については、「主体的な学び」が実現された姿として設定されるべきなので、表3で示した「主体的な学び」の具体像をもとに設定した。「評価規準」の「A」については、学習の実現の程度について質的な高まりや深まりをもっていることが見取れる姿として各教科で設定するものとした。

『主体的に学習に取り組む態度』の評価の枠組みを活かしながら、各教科で次の通り実践を重ね、「主体的な学び」に向けた指導と評価のあり方について研究を深めたい。

まずは、単元における「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準、評価場面の設定についてである。教科や題材の特性によって、表3で述べたような「主体的な学び」の姿のすべてを実現することは難しいと考えられる。そこで、教科ごと、単元ごとにプロセスモデルの中で重点的に取り組む学習過程を決め、それに基づいて単元の「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準、評価場面を設定したい。

次に、「主体的な学び」を表出させる方法についてである。本校では、内容に多少の違いはあるが、多くの教科で、生徒が自らの学びを振り返るワークシートを活用している。そこで、「振り返りのワークシート」を使った実践を積み重ねて、何を記述させれば生徒の学びの姿を捉えることができるのか、具体的にどのような支援が考えられるのか深めたい。「主体的な学び」の具体像は、教科によって違いがあると考えられるので、「振り返りのワークシート」への記述のさせ方にも教科による違いが表れると考える。一人一台パソコンが実現している学年については、ICTを活用した振り返りを実践したい。また、ワークシート以外の評価材についても、各教科の特性に応じて工夫したい。

最後は、評価規準の設定と生徒への支援についてである。各単元において、「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準をどのように設定すべきなのか、授業実践を重ねる中で明らかにしたい。また、「C」の生徒を「B」以上の評価に高める手立ての具体も明らかにしたい。

表4 「主体的に学習に取り組む態度」の評価の枠組み

評価の観点	評価規準		Cの生徒をBに高める手立て	
	A	B		
		粘り強く学ぶ		自己調整しながら学ぶ
目標設定	学習の実現の程度について質的な高まりや深まりをもっていることが見取れる姿	<ul style="list-style-type: none"> <li>単元の学習内容を、他教科の学習や自らのキャリア、生活、自らが生きる社会と関連づけて学習に取り組もうとしている。</li> <li>単元の学習内容に興味や価値を見出して取り組もうとしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>単元の目標に沿った、自分なりの学習目標を立てている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>目標の立て方の例を示す。</li> <li>他の生徒が立てた目標を紹介する。</li> <li>単元間のつながりや他教科とのつながりを説明する。</li> <li>学習内容を生徒の関心や生活と関連づけて説明する。</li> <li>学習内容の実践的価値を示す。</li> </ul>
方略計画		<ul style="list-style-type: none"> <li>自らの学習目標の達成を目指して、よりよい学習方略を考えようとしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>過去の学習経験を活かしながら、目標達成のための学習方略を考えている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>類似する内容を学んだ時の学習方略を例として示す。</li> </ul>
遂行		<ul style="list-style-type: none"> <li>自らの学習目標の達成を目指して、粘り強く学習に取り組んでいる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>計画した方略や必要に応じて調整した方略に基づいて、個人やグループでの学習活動に熱心に参加している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒の学習活動について、個人や集団など様々な単位で肯定的な声かけを行う。</li> </ul>
振り返り		<ul style="list-style-type: none"> <li>自らの学習方略の成果と課題をよりの確にとらえようとしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自らの学習方略をモニタリングし、その成果や課題を挙げている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒の振り返りに対してフィードバックを行う。</li> <li>他の生徒の振り返りや方略調整について紹介する。</li> </ul>
方略調整		<ul style="list-style-type: none"> <li>自らの学習目標の達成を目指して、よりよい学習方略を求めて、必要な修正を続けようとしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>必要に応じて学習方略を修正している。</li> </ul>	
全体の振り返り		<ul style="list-style-type: none"> <li>単元の学習を通して、自らの目標達成のために努力し続けたことを明確にしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>単元の学習を通して、自らの目標達成のために工夫したことやその成果と課題を明確にしている。また、それを次の学習に活かそうとしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒の具体的な学習活動の様子を挙げるとともに、振り返るための視点を具体的に示す。</li> </ul>

## 6. 参考文献

- ・鹿毛雅治『学習意欲の理論』金子書房、2013年
- ・鹿毛雅治『授業という営み——子どもとともに「主体的に学ぶ場」を創る』教育出版、2019年
- ・櫻井茂男『学びのエンゲージメント』
- ・櫻井茂男『自律的な学習意欲の心理学』誠信書房、2017年
- ・櫻井茂男『学習意欲の心理学』誠信書房、1997年
- ・C. M. ライゲルース・B. J. ビーティ・R. D. マイヤーズ著、鈴木克明監訳  
『学習者中心の教育を実現するインストラクショナルデザイン理論とモデル』北大路書房、2020年
- ・東海国語教育を学ぶ会「学びのたより」2016年
- ・安宅和人『シン・ニホン』ニューズピックス、2020年
- ・横浜国立大学教育学部附属横浜中学校編『「学びに向かう力」を育む授業事例集』学事出版、2020年
- ・名古屋隆彦『質問する、問い返す——主体的に学ぶということ』岩波書店、2017年
- ・田村学『深い学び』東洋館出版社、2018年
- ・田村学『学習評価』東洋館出版社、2021年
- ・竹村詠美『新・エリート教育——混沌を生き抜くためにつかみたい力とは?』日本経済新聞出版、2020年
- ・本田由紀『教育は何を評価してきたのか』岩波書店、2020年
- ・Society 5.0 に向けた人材育成に係る大臣懇談会新たな時代を豊かに生きる力の育成に関する省内タスクフォース「Society 5.0 に向けた人材育成——社会が変わる、学びが変わる」2018年
- ・北尾倫彦『「深い学び」の科学——精緻化、メタ認知、主体的な学び』図書文化社、2020年
- ・自己調整学習研究会編『自己調整学習——理論と実践の新たな展開へ』北大路書房、2012年